

【類型3】里地里山の身近な自然、地域の産業や生活文化の活用した取り組み

発表者

田尻地区：財団法人日本生態系協会 遠藤立
飯能・名栗地区：飯能市市民生活部エコツーリズム推進室 安藤泰雄
飯田地区：NPO法人ふるさと南信州緑の基金 小林天心
湖西地区：高島市企画部企画調整課 森田 茂之
南紀・熊野地区（三重県）：紀南振興プロデューサー 橋川史宏
南紀・熊野地区：和歌山県環境生活総務課自然環境室 易本九栄
司会：財団法人日本交通公社 菅野正洋
飯能市市民生活部エコツーリズム推進室 岡部隆志

田尻地区 発表：財団法人日本生態系協会 遠藤 立

- ・ 本日、蕪栗沼がラムサール条約に登録される。町長や関係者は現在会議が行われているウガンダに行っており、この場でも是非発表するように言われた。
- ・ 田尻町は仙台市から北東に約 50 kmの場所に位置している。周囲には田んぼが広がり、東北の代表的な田園風景が見られる。
- ・ 面積が約 65 平方キロ、農地がそのうち約 56%を占める。町の人口は 1 万 3 千強、基幹産業は農業、特に稲作が 90%を占める。
- ・ ツーリズム推進の現状と課題について。地区選定の理由になっているマガン、大型の水鳥の渡来地として有名になっている蕪栗沼では、平行して農林水産省で生息環境改善のための取り組みが行われている。具体的には周辺で冬期湛水水田を試行している。
- ・ マガンは多いときで 3 万、4 万羽が渡ってくる。このマガンの雄大な群れを目玉に一般の観光客を呼び込みつつ、冬期湛水などの取り組みをしているところが選定理由となっている。
- ・ 年代を追うに従って、蕪栗沼は農地として干拓され、面積が小さくなり、乾燥化してきた。この課題を克服するため、隣接する農地約 50 ヘクタール、これを遊水機能があるということで、湿地に戻すという再自然化を行っている。
- ・ 冬に田んぼに再度水を張って、水鳥が降りられるようにもしている。これが冬期湛水水田だが、分かりやすい言葉として「ふゆみずたんぼ」と呼んでいる。ここでとれた米は自然に優しいお米ということで「ふゆみずたんぼ米」というブランドで生産、販売している。
- ・ 田尻地区の目標は自然環境の保全と地域振興のバランスある展開である。この考え方はエコツーリズム推進マニュアルにある「環境と観光」の調和を図りながら融合する、ということに合致している。

- ・ 地区の取り組みの目玉は、念願であったラムサール条約登録に向けた努力であり、ついに実った。まず本年の9月に国指定蕪栗沼・周辺水田鳥獣保護区及び同蕪栗沼特別保護地区の指定を受けた。その後ラムサール条約に規定する湿地として登録し、本日ウガンダで認定の運びとなった。
- ・ 特筆すべきことは蕪栗沼周辺の水田を含めて指定された、ということである。これは人とガンが暮らしの場を共有しながら、かつ優れた環境を守り続けてきた、ということが評価されたということだ。この姿勢をエコツーリズムということを通じて国内外に発信していきたい。
- ・ 町長等がウガンダに行くのにあわせて、英語版のパンフレットを作成し、日本の蕪栗沼にお越し下さい、ということで、外国人誘致を視野に入れた活動をしている。
- ・ 昨年度の取り組みについては、まず推進協議会を設置し、これに重きを置いてきた。地域の自然の保全に貢献してきた人などをまずメンバーとして、あとは地元から公募とした。推進支援機関に知識、技術があったとしても、ここが引っ張っていたのではいつまでも地元が自立できない。だから推進協議会での議論を最重視した。
- ・ 初年度は内外の機運を高めるということで、キックオフシンポジウムを行った。また試験ツアーということで、「マガンと共存する『ふゆみずたんぼ』宮城県蕪栗沼ツアー」を実施した。ここでは地元の農家が昔ながらの蓑を着て説明するということも盛り込まれた。
- ・ 今年度を実施した事業内容と成果・反省点としては、ほとんどが現在進行形なので、その経過過程を紹介したい。
- ・ まず人材育成の取り組みとして、田尻エコツーリズム講座を開いた。室内講座は4つ、体験学習は6つの講座を用意した。講師は地元で活躍している人材である。
- ・ 試験ツアーは3つ大きなイベントとして予定している。一つは夏の田尻を売れないか、ということでチャレンジした農家民泊である。
- ・ 仙台広域圏エリアがユネスコの環境教育のモデルエリアに指定されている。11月22～25日にセミナーが行われるが、翌日にメモリアルイベントとして、海外からの訪れる人を田尻地区に案内し、外国人向けの試験ツアーを行う。
- ・ 3つ目は冬のツアーである。産地エコツアーということで、宮城のひとめぼれ、ふゆみずたんぼ米がどういう順序で、どういう物語をもっているのかということを紹介する。エコツーリズムとグリーンツーリズムの要素を合体させたようなツアーである。
- ・ もう一つはエコツーリズムフォトコンテストで、資源の発掘とあわせて展開中である。
- ・ 具体的事業を展開する2年目に対して、推進協議会、意見交換会、作業部会等の話し合いの吸い上げを通じて、最終年度は仕組みを作る。今は環境省をはじめ様々な機関、人のバックアップがあって動いているが、自立するためのコーディネート組

織を今年度内にたちあげる。次年度はこの組織が中心となってモデル事業を展開する、という段取りで進めている。

- ・ 他、エコツーリズムの環境・経済面での効果のモニタリング、今年度から開始している人材育成講座の拡充、プログラム・商品企画、(今年から検討しているが)更なるアイデアの補充と参加者を増やしていくための仕掛けイベント実施、さらにエコツーリズム商品の認証制度の策定などを考えている。
- ・ 田尻町は来年の3月に合併して大崎市となる。新市でも田尻町の理念が全域で浸透するような仕組みづくりなどが、限られた3年間のなかでやらねばならないこととしてある。
- ・ 田尻が「渡り鳥と共生する環境の町『田尻』」というメッセージをずっと送っているが、この気持ちが地区にある以上、エコツーリズムはずっと続いていくと期待している。
- ・ 田尻町には豊かな人材があり、自然がある。ふゆみずたんぼの取り組み、伝統的な手法、歴史、文化をあわせてエコツーリズム推進に取り組んでいる。エコツーリズムが大きな波及効果を生むよう、環境面、教育面、社会面、経済面といったところを考えて、地区の基幹的な取り組みとして努力している。

質問1

- ・ 観光客はどこから来ているのか。割合で良いから教えて欲しい。

田尻地区

- ・ 東北の場合、観光客の多くは仙台止まりとなってしまう田尻地区まではあまり来ない。ただ、田尻地区の周辺には伊豆沼・内沼という有名な探鳥地があるのだが、そこからもっといいフィールドがあるらしい、ということで人伝えに聞いて、今少しずつ訪れる人が増えている。ただ未整備であったところにも立ち入られてしまい、警戒心の強いガンが逃げってしまうということがあった。また、マガンが渡ってくるエリアと稲作エリアは非常に近いのだが、マガンを見る観光客が人の生活圏に入り込んでしまう、という課題もある。これらをモデル事業を機に整備していきたい。

質問2

- ・ 年間を通じたツアーの連続性を持たせるための工夫があれば教えてもらいたい。

田尻地区

- ・ マガンを見る時期は非常に限られている。冬、さらには時間帯も限られている。春夏秋冬、時間を限らずにツアーを実施することが課題であった。そこで、マガンが田尻に来るには訳がある、それはここの生活、農業形態のあり方にあり、ともすれば農作物に害を与える害獣を地区が認めて共生しているという姿そのものが持ち帰ってもらいたい資源であると考えた。だから農家というものにスポット

を当てている。農家の四季を通じた暮らしづくりをプログラムに生かしている。リピーターづくりのための登録制度などが議論にあがっているが、これから検討する段階である。

質問 3

- ・ 運営母体となる組織はどういったところが担っているのか。

田尻地区

- ・ 推進協議会で出ている案では、先行した取り組みを実施しているグリーンツーリズムの事務局となっている、町が出資をしているセクターで穂波公社という組織があり、現時点ではそこを活用するという考えが前提となっている。

飯能・名栗地区 飯能市市民生活部エコツーリズム推進室 安藤 泰雄

- ・ 指定を受けた時点では飯能市、名栗村であったが、今年の1月1日に合併し、飯能市となった。
- ・ 埼玉県南西部にあり、都心から約40km。
- ・ 面積は193.16平方kmで埼玉で2番目の広さである。森林が4分の3を占める。人口は約86,000人、近年人口減少に転じる。
- ・ 丘陵の雑木林、山地の二次林・自然林・人工林、また源流から中流までの変化に富み近寄りやすい川があり、親しみやすく変化に富んだ自然となっている。また古い歴史をもつ社寺、郷愁を誘う山村集落もあり、こころを潤す魅力的な歴史文化も併せ持っている。
- ・ 都心から電車で1時間、遠足やハイキングで訪れることができ、身近で便利な立地条件となっている。
- ・ 西川林業、飯能大島紬など地域の自然や文化に育まれた産業と技術の伝承者もいる。
- ・ NPO等の団体もあり、エコツーリズムに近い活動をしている。個性の光る人や団体、取り組みの蓄積があると言える。
- ・ 今年度のモデル事業における実施事業については、まず基本計画の策定である。平成16年度に準備委員会で検討した基本計画(案)を再検討し、飯能名栗エコツーリズムの基本的な考え方や、目標などを示した基本計画を策定する。
- ・ プログラムの開発については、調査により発掘された地域の個々の資源を活かしたプログラムを開発する。
- ・ 事業への興味を高めるとともに、早い段階からのデータの蓄積による効果的な事業の推進を図るために、パイロット事業の立ち上げを進める。今年度は、昨年度検討したパイロット事業(案)をもとに、実施方法の検討や広報等の準備、実施、結果の整理を行う。
- ・ 人材の育成については、昨年度検討した(仮)飯能名栗エコツーリズムカレッジ(既に始まっている)をもとに、ガイドの養成を目標とした講習会を開催し、修了者を

対象とした事業への体験参加を行う。

- ・ 普及・広報に関しては、住民のエコツーリズムへの理解と推進の機運を高めるために、市報、ホームページ、パンフレットなどを通じて普及・広報を行う。
- ・ エコツーリズム推進協議会の設置と協議会の開催については、エコツーリズムの推進に向けて協議会への参加が望まれる人材を選定し、エコツーリズム推進協議会を5月12日に立ち上げた。本年度は協議会を5回実施する。
- ・ 推進機関の設置については、昨年度検討した(仮)飯能名栗エコツーリズムセンター(推進機関)の設立を目指し、(仮)飯能名栗エコツーリズム活動市民の会と(仮)飯能名栗エコツーリズムカレッジおよび飯能名栗エコツーリズム推進協議会を設置し、エコツーリズムを効果的に推進する仕組みを検討する。
- ・ 基本計画の策定については、5月に協議会から承認を受けた。パイロットツアーの実施と検証については夏から秋にかけて8つのパイロットツアーを実施した。人材育成についてはオープンカレッジを10月15日から開催している。またエコツアーの事前協議制度を取り入れた。
- ・ 飯能名栗エコツーリズムの基本計画は、自然・文化・人のネットワークによって発展する活力ある地域をもとに設定している。
- ・ そして基本方針を3つ定めている。方針1が「飯能名栗の自然や文化を保全・再生して将来へ伝えます」方針2が「訪れるたびに新たな発見や変化がある楽しく満足できる旅を提供します」方針3が「すべての地域と人の参加により、地域への誇りと愛着を育み、地域と人の個性を輝かせます」である。この3つの方針に従って事業を推進していく。
- ・ 飯能名栗のエコツアーは「里地里山や山村の自然と文化を、人とのふれあいと体験によって楽しみ慈しむ旅」というコンセプトで実施する。
- ・ 平成17年8月～11月に7つのエコツアーを実施した。ここでは8月28日・29日に実施した「白刃きらめく獅子舞を深く愉しむたび」(料金2,500円 参加者数29名)と「山里名栗の歴史散歩(昼食つき)」(料金3,500円 参加者数19名)を紹介する。
- ・ 1日目の諏訪神社の獅子舞は、県の無形民族文化財に指定されている。ツアーには保存会の協力などもあった。また地元のお年寄りからの解説もある。参加者に獅子頭などをじかに手にとってもらった。ここの獅子舞は真剣を使うのが特徴となっている。
- ・ 2日目は、雨乞いの寺として有名な龍泉寺の住職からの解説がある。また、炭焼き文化の説明や、昭和4年に作られた旧名栗郵便局、県の有形文化財に指定されている名栗川橋の見学もある。さらに農産物の直売所にも立ち寄った。
- ・ 飯能名栗でエコツーリズムの推進するためには、多くの人々がエコツアーの主催者として取り組むことが望まれる。しかし、一方でエコツアーが増えてくると、エコ

ツーリズムの目的や考え方から逸脱したものが行われる可能性も生じてくる。エコツアー事前協議制度は、エコツアーの内容について事前に確認・協議を行うことにより、適切なエコツアーが行われるようにし、飯能名栗のエコツアーの質を維持することを目的として実施する。また、飯能名栗で行われるエコツアーに関する情報の集中による効果的な推進や、エコツアーを企画、実施する人々の意識向上、さらには、エコツアーを企画、実施する人々の相談窓口として役立てることも目的とする。

- ・ 方法としては、エコツアーを企画した団体や個人に、エコツアーの概要を推進協議会事務局に企画シートとして提出してもらう。協議会事務局でエコツアーの内容について確認し、必要に応じて協議を行う。確認・協議したエコツアーについて、協議会事務局は広報等で協力する、という流れである。
- ・ チェックは事務局と6人の委員が行う。エコツアー事業者は企画シートを作成して事務局に提出する。事務局は企画シートの内容を確認し、検討し、企画を修正する。そしてそのシートを6人の委員に提出する。委員の間でも修正し、事業者に戻し、更に修正する等の手続きを経て事前協議は終了する。
- ・ 企画シートの項目はエコツアーの名称、エコツアーの概要、日時（集合や解散の時間、場所、雨天時など）、場所・ルート・タイムスケジュールなどである。
- ・ 協議シートの項目はエコツアーの素材（地域の自然や文化が素材か）、地域の自然や文化の保全について、安全対策について、などが項目になっている。
- ・ オープンカレッジの目的はエコツーリズムの基礎的な知識や、飯能名栗の歴史文化、ガイドの技術などを学び、飯能名栗エコツーリズムの協力者を増やし、連携しながら共に飯能名栗エコツーリズムを推進していくこと、である。エコツーリズムやエコツアー、自然環境や歴史文化、環境問題などに関心がある者を対象とする。受講料は2,500円で全5回。10月15日から始まっている。30名募集したところ、37名から応募があり、全員に受講してもらうことにした。

質問1

- ・ ツアーの作り方が参考になった。第1次産業に携わる人が非常に少ないなかで、自然を相手にしたツアーを組むために、人材等の工夫をしているのか。

飯能・名栗地区

- ・ 林業はかつては盛んだった。ただ木材が安いので手入れが十分にできない山林もある。こういう中で、林業家にパイロットプログラムに入ってもらったりしている。また、飯能市は森林文化都市宣言を行った。市全体で取り組んでいる。

質問2

- ・ エコツアーは素人では難しい部分もあるが、工夫をしているのか。

飯能・名栗地区

- ・ 今間伐体験を行っている。また切った木を使ってペンダント作りなども行っている。

質問 3

- ・ 事業者のツアーを協議会がチェックするということが、事業者には林業団体以外にどのようなものがあるのか。また、事業者と協議会の関係はどのようになっているのか。

飯能・名栗地区

- ・ 事業者は林業家を含む。協議会との関係については、事業者と事務局でツアーについて確認し、ある程度の部分まで仕上げ、そのあと委員に確認してもらう。

質問 4

- ・ 埼玉県からの支援はあるのか。

飯能・名栗地区

- ・ 埼玉県緑自然課 1 人と西部地域総合センター 1 人が推進委員として入っている。人的支援を受けており、補助金はない。

飯田地区 NPO 法人ふるさと南信州緑の基金 小林 天心

- ・ 飯田市は長野県の南端に位置し、飯田市と南信州 18 市町村を我々は代表している。富山県と境になっている中央アルプスと静岡県との境になっている南アルプスの中心にある盆地、伊那谷の南半分に位置し、中央に天竜川が流れる。特徴は標高が 300m から 3,000m と垂直的であることである。
- ・ 南信州はかつては養蚕が盛んであった。飯田は交通の要衝で商業が盛んだった。農業も盛んで、中信、北信と比較するとそれほど観光に熱心な地域ではなかった。現在でも長野県の全入り込み者数の 5% 程度を占めるに過ぎない。
- ・ しかし最近な観光にも力を入れ始めている。特に体験型教育旅行に力を入れている。
- ・ 体験から導かれたもの、それがエコツーリズムである。そこから視点は地域振興まで伸びている。
- ・ 南信州には樹齢 300 ~ 400 年を越える桜がある。桜守というガイドと一緒に桜を見学するツアーがある。普通桜は 1 週間程度だが、標高差があるので、トータルとして 1 ヶ月間桜が見られる。桜守の旅の効果としては、まず市民インストラクターによる地域資源の見直しがある。以前は一本桜の観光資源化は考えられなかった。桜守が同行し、名桜の由来、暮らしとの結びつき、樹木医的見地などを語ることで顧客満足度が高まる。
- ・ 集客は初年度から 3,000 人を超えており、平成 17 年は 1 万人まではいかないものの、かなり参加数を増やしている。夜桜ツアーも行い、滞在型の参加者を増やそうとしている。

- ・ 南信州のエコツーリズムの推進は、南信州観光公社がキーになっている。公社は、販売促進、受け入れ、手配一切を引き受けており、全国でも先進的なものである。200種類の体験の素材を用意している。
- ・ 南信州こども体験村とは夏休みの子供のキャンプで、リピート率が高い。どんぐりの森小学校とは、都会の子を飯田に招き、廃村に滞在し、自然体験をしてもらう。あぐり大学院は先生方に自然、田舎の暮らしを知ってもらうものである。
- ・ 飯田の場合、グリーンツーリズム、体験型という枠より、もっと広いものになっている。生活の変化なども視野に入れて考えている。成果としては、南信州ブランドの構築が始まっていることで、訪れる団体は数百に達する。
- ・ オーライ日本の総理大臣賞の受賞、エコツーリズム大会の実施、モデル事業に指定されたこと、観光公社の存在、こうしたものをトータルで南信州ブランドの構築と位置づけている。
- ・ 誇りと自信の回復、景観の回復・自然保護、新しい雇用の場の獲得、所得の向上、地域認証基準の創設（これから）、地域自然・環境活動のネットワーク化を現在推進中である。
- ・ 課題としては、地域をもっと知る、地域の人材をもっと生かす、ということである。エコツーリズムという磁石を使って、外から人材を集めることができるようになった。また、地域のなかに、自然のことを真剣に考えている人がいっぱいいたということの思い知らされ、発掘することができた。これらはエコツーリズムの磁石効果と言っていい。これをもっと発展させたい。
- ・ 最終的にはサステイナブルな地域の経済活動、観光活動、生活文化を通じて、収入が増え、幸せなライフスタイルが築ければよいと思う。
- ・ 今年の3月4~6日に全国エコツーリズム大会 in 南信州を飯田市で行った。飯田市としては、自然・文化・歴史・民俗・人・産業等の資源調査、インタープリターの養成、エコツアーの開発とプロモーション、トレッキングルート等の整備、等を行っている。最終的には南アルプスが世界遺産に登録され、そのことがシンボルとなり、もっと多くの人々が来るようになればよい。エコツーリズム大会では11個の分科会を開催した。
- ・ 南信州から静岡に抜ける秋葉街道という道がある。これを復活させようという運動が地元の有志を中心にはじまった。これにつられて清内路街道調査もはじまった。ツアーを行ったところ、地元の人が200名も参加してくれた。
- ・ 南アルプス赤石山脈をもっと活用しようということで、登山家の大倉さんが中心になって部会が持たれている。月1回程度で活発な議論を行っている。
- ・ これからの展望だが、街道サミットの開催、南アルプスシンポジウムの開催、認証制度部会のスタート（ガイドおよびエコツアーそのもの）、モニターツアー（17年冬~18年春）の実施、環境保全ツアーの実施（ごみ拾い等含む）などを計画中で

ある。

- ・ 最終的には南信州に住んでいる人が、もっとエコツーリズム、サステナブルということを通じて、生活スタイルが変化するに至るといったことを視野に入れている。必ずしも理想の形で進んでいるわけではないが、一人ひとりの住民の参加を得ながら、エコツーリズムの流れを加速、進化させたい。

質問 1

- ・ 長野県からの支援はあるのか。

飯田地区

- ・ 県からは補助金も人材も何の支援もない。

質問 2

- ・ 地域住民がより主体的に取り組むようにするポイントは。

飯田地区

- ・ 18 市町村を回りながらシンポジウム、勉強会を行っている。それを通じて地元住民の理解を深めると同時に、直接依頼し、理解者を増やしている。

湖西地区 高島市企画部企画調整課 森田 茂之

- ・ 高島市は琵琶湖の北西部に位置する。面積は 511m² で県下で一番広い。今年の 1 月 1 日に 5 町 1 村が合併し、高島市となった。
- ・ 琵琶湖を擁しているため、取り組みテーマは「水の流れ、命の流れを体感するエコツアーを目指して」としている。
- ・ 平成 16 年度の取り組みについてだが、まず現況把握と課題整理を行った。湖西地区における観光利用の現況や来訪者の動向等について整理を行い、また環境保全活動の現況把握と課題整理についても主要な活動団体に対して聞き取り調査を実施し、活動の概要と抱えている課題等について把握をしている。
- ・ エコツーリズム推進組織の設立に向けた準備としては、湖西地域エコツーリズム推進協議会の設立に向けて、コアメンバーからなる設立準備会を 2 回開催した。その成果としては、エコツーリズムを推進していくための組織の基盤が構築された、という点である。
- ・ エコツーリズムへの取り組み気運醸成として、まず新旭発エコツーリズムキックオフとして写真家・今森光彦氏と嘉田由紀子氏の対談を実施した。また、第 2 回森里湖(もりっこ)交流会 エコツーリズムフォーラムでは C.W. ニコル氏を講師に迎え、「郷づくりとエコツーリズム」と題して講演を実施した。この成果として、一般住民に対し、地域としてエコツーリズムを推進していくという姿勢を示すことができた。
- ・ 取り組みを進めるにあたっての課題としては、 地域一体となった取り組みの不足、

生活や自然とツアーの両立を図るルールやガイドラインの確立、 経済的に持続できる内容と仕組みの構築、 各種業法との整合性、 が挙げられる。

- ・ 地域一体となった取り組みの不足については、現在いろいろな取り組みが地域でなされているが、個別に見ると、広報や情報発信、受け入れなどが一体となっていない。こうしたことを一体的に行う組織を設立することが望ましいわけだが、高島市観光振興協議会、観光協会の主体的な取り組みが望まれるところである。
- ・ 生活や自然とツアーの両立を図るルールやガイドラインの確立については、ツアーの対象となる地域が、住民の生活の場や絶滅危惧種などが生息する場であることもあり、地域住民の受け入れの理解を促すための基盤整備や旅行者の守るべきルールやガイドラインの確立が求められる。
- ・ 経済的に持続できる内容と仕組みの構築については、現在のプログラムは実費相当額を徴収しているものがほとんどであり、経済的な持続性を考慮して内容や価格設定が行われているものが少ない。今後は、より一層のプログラム内容の充実と高付加価値化を図って行く必要がある。またその際、例えば地域資源の保全活動を組み込んだプログラムや、参加料金の一部が資源保全に充当されるような仕組みを構築することによって、湖西ファンの思いが実際の環境保全に役立っていることを目に見える形で実感してもらえそうな仕組みを構築していく必要がある。
- ・ 各種業法との整合性では、ボランティア団体や個人ガイドが実施するツアーに関して、旅行業法や道路運送法などとの整合性を図っていく必要がある。当面は、旅行会社等とのタイアップによりツアーを企画・販売することを想定する。最終的には、前述の高島市観光振興協議会等の組織が旅行業登録することにより対応するなどの方向性が考えられる。
- ・ 平成 17 年度に実施した事業内容については、まず、推進組織（湖西地域エコツーリズム推進協議会）の立ち上げである。高島市長を会長とし、市民活動団体、商工事業者、運輸事業者、農林漁業関係者、有識者で構成されている。
- ・ 成果として、地域として一丸となって取り組んでいくための体制が整った。課題として、参画主体の間で取り組みに対する温度差があることは否めず、今後は特に民間事業者の意識をいかに醸成していけるか、があげられる。
- ・ 2 つ目として、地域の取り組みの一体的な PR と評価である。湖西地域で実施されているガイドツアーや体験プログラムを共通の媒体によって一体的に PR し、評価する試みである「湖西まるごと体験博」を実施した。
- ・ この「湖西まるごと体験博」の目的は、 募集・受け入れの体制を試行的に構築する、 プログラムに対する評価を行う、 住民に取り組みを知ってもらい、気運を醸成する、ということである。
- ・ 募集・受け入れの体制を試行的に構築する点については、ガイドツアーや体験プログラムの受け入れの仕組みを試行的に構築し、一元的に PR することによって、よ

- り効果的な受け入れの仕組みのあり方を探る、ということである。
- ・ プログラムに対する評価を行う点については、ツアーや体験プログラムについて、参加者の反応や意見を聴取することにより、課題や今後の方向性を一元的に把握し、内容の改善につなげる、ということである。期間は10月1日から11月30日の2ヶ月間で、参加プログラム数は32プログラムである。
 - ・ 成果としては、これまで個別に活動していた市民活動団体や事業者の取り組みを一体的にPRすることが出来、今後の取り組みのためのネットワークの基盤を構築することが出来たことである。課題としては、ターゲットとする関西圏の湖西ファン創出に向け、より効果的なPR方法を検討する必要がある、ということがあげられる。
 - ・ 住民に取り組みを知ってもらい、気運を醸成する点については、最終的な目標としては関西圏をターゲットして環境学習、生活文化学習に先進的に取り組む地域であるというイメージを確立することを目指す。この試みでは主に地元の住民の参加を得て、その反応を見るとともに、湖西地区におけるエコツーリズムへの取り組みを知ってもらうことに重点を置く。
 - ・ 平成18年度の目標は、「湖西まるごと体験博'06夏」の実施、モデルエコツアーの実施、エコツーリズム推進マスタープランの策定、の3つである。
 - ・ 「湖西まるごと体験博'06夏」については、まず、平成18年夏期を想定し、プログラムを集約して一元的にPRと評価を行う。そして、より多くの活動団体の取り組みを拾い上げられるような形式とする。媒体としてはパンフレットの他にもウェブサイトなど、よりPRの費用対効果が大きい媒体を採用する。
 - ・ モデルエコツアーの実施については、「湖西まるごと体験博'06夏」に併せて、河川流域や生活圏をフィールドとし、基本コンセプト「水の流れ、命の流れを体感する『里山体験塾』」に合致するモデルエコツアーを開発、実施する。また「モデルツアー実行委員会」を立ち上げ、湖西地区ならではのエコツアーのあり方についても検討を進めていく。ゾーニングと重点フィールドの例としては、流域を1つのテーマとする。
 - ・ 湖西地域エコツーリズム推進マスタープランの策定は、湖西地区でエコツーリズムを推進していくにあたり共通認識となる「湖西地域エコツーリズム推進マスタープラン」を策定する。これは、各地区の特性に応じた、今後ツアーを実施していくにあたっての“ガイドライン”のたたき台となるものである。
 - ・ エコツーリズム推進マスタープランの検討項目は エコツアー実施にあたってのルール、ガイドライン（湖西体験心得）策定の必要性とその内容（ルール、ガイドライン導入の必要な場所や地域資源、ルール、ガイドラインの内容、ルール、ガイドラインの運用方法）、エコツアーの受け入れ体制（組織）のあり方（受け皿組織の方向性（観光協会またはNPO）、各種業法との関連） エコツアーのガイド（里

山案内人)の能力とツアーの品質確保方策(能力、技術の向上方策、認定制度(お墨付き)の必要性と内容)、エコツアーとの融合により地域資源を保全する仕組みのあり方(保全の必要な場所や地域資源、想定されるエコツアーとの融合方策)がある。

質問 1

- ・ 相当数のツアーを実施しているようだが、どうしてそのようにたくさんプログラムができたのか。またどのような事業者がツアーを行っているのか。

湖西地区

- ・ 32 のプログラムがあるが、5 つの実施主体が実施している。金額は実費程度の参加費しかとらない。プログラムは山登りが多いのだが、もともとボランティアで実施しているものがあつた。それらを今回活かした。

南紀・熊野地区(三重県) 紀南振興プロデューサー 橋川 史宏

- ・ 三重においては、紀南ツアーデザインセンターがエコツーリズム推進の中心を担っている。
- ・ 当該地域は紀南地域の東半分、三重県側にあたる部分に位置する。大化の改新までは熊野の国があり、歴史的には古い。江戸時代は紀州藩の領地で、明治以降の廃藩置県で和歌山と三重に分かれた。
- ・ 人口は 44,300 人、大阪から車あるいは電車で 3~4 時間で、日帰り観光がかるうじてできる地域である。この点はエコツーリズム推進上の課題となっている。
- ・ 観光客は約 100 万人程度で、通過型の観光地である。みどころは、一部が世界遺産となった熊野古道伊勢路で、少し古めかしい観光地である。他にも見どころはあるが、それだけで誘客力を持つものではなく、観光的には弱い。そういうなかで、エコツーリズムを推進すれば何か解決できるのではないかと、という期待感を持っている。
- ・ これまでの方向性は産業振興や社会資本整備であつた。産業のために環境・文化を犠牲にすることがあつた。また、スローからファーストへの転換による、経済的発展、効率性の追及ということも指摘できる。これらの全てを否定する訳ではないが、今後は平成 16 年世界遺産登録された熊野古道の文化的景観を守りながらの発展、深く厳しい自然の中で育まれた、熊野の信仰の歴史と生活文化を守りながらの発展を意識する。
- ・ 16 年度は紀南エコツーリズムの理念の確立と普及、17 年度はエコツアーの実践、人材育成、地域の受け皿作り、そして 18 年度はエコツアーの事業化、という流れで考えている。
- ・ モデルツアーを年間 20~30 くらい実施したい。初年度は 10 しかできなかったが、今年は上半期で 14 行った。このようなコースをメニュー化していきたいと考えて

いる。

- ・ ガイドやインタープリターも養成したい。世界遺産になったことを受けて、100人くらいのガイドがいる。しかし、いわゆるボランティアガイドである。お客様からお金を得るといふこと、貰うことばかり考えてはいけぬ。地域のために私たちができることは何なのか、あるいはお客様に喜びを提供する、このように考え方を改めていかなければならない。こういう発想からのプロ化が必要である。
- ・ これまでは自分の町にお客様を受けるなど考えなかったが、受け入れてみると楽しいことが分かった。そういう意味での意識変革がなされている。
- ・ お客様を受け入れるなかで課題として浮かび上がってきたのは、「紀南」における「熊野」の回復ということ。「自然とともに生きる」という理念の普及、旅、ツーリズムとしての楽しさ、深さの追求が必要である。
- ・ 理念を大事にしながら、我々はどこに行こうとしているのか、を考えることが大切である。理念づくりには力を入れている。基本的には「現代社会のニーズに合わせる」ということが大事である。教養を養う、今の時代に豊かさを感じる、そういう感性を、提供する側、受ける側双方が共有する。もう一度スローな社会に戻る必要がある。ただし、技術力、経済力、これは昔のスローの時代よりもはるかに進歩した。こうしたものを利用したスローを提供する。そうでなければ現代人は納得しない。
- ・ 紀南エコツーリズムは、次の3つを宣言している。 三重・紀南には、熊野の自然の中で育まれた独自の文化が残っています。「旅」を通じてその文化を楽しみ、学び、大切に守っていきます。 自然、信仰、祭、食、技……。現代の暮らしの中に豊かさを求める人が集い、感動や喜びを共有できる場、「自然の一部になる瞬間」を提供します。そして、発展した現代社会の中で、「自然の摂理を知り、自然とともに生きる知恵を求める」ことの価値を明らかにします。
- ・ 推進体制はツアーデザインセンターを中心として、環境省などの協力を得ながら勤めている。昨年度はモデルツアー、人材育成、広報など、機運作りに重点をおいた。今年度はモデルツアーの実施、理念の確立と普及（アライアンスの構築、ネットワークの形成）、広報（紀南エコツーリズム通信の発行）を行う。
- ・ 最終年度は、モデルツアーは商品化まで、理念の確立と普及については事業体制の構築まで、広報についてはシンポジウムの開催と社会貢献まで取り組む。

南紀・熊野地区（和歌山県） 和歌山県環境生活総務課自然環境室 易本 九栄

- ・ 紀伊半島西南部が和歌山県側で、モデル地区の対象は海岸線と内陸地区である。指定時は12市町村あったが、今は7市町村となった。
- ・ 観光客数は近年、減少傾向にあったが、平成16年度は、世界遺産効果もあり増加しており、平成16年は850万人あまりの観光客が訪れた。体験型観光客数は年々増加しており、平成14年は10万7千人程度だったが、16年は18万人以上となっ

た。

- ・平成 11 年に「南紀・熊野体験泊」を実施した。これ以降「ほんまもん体験」として体験型観光の推進を図っている。
- ・ほんまもん体験には 3 つの特色がある。1 つは和歌山県の自然や人々の日々の暮らし、営みを素材としていること。2 つ目が観光客の五感を使うものであること。3 つ目が観光客と地域住民との触れ合い、交流があること。このほんまもん体験は全体験の 70% を占めている。
- ・主な出来事として、1 つは「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録である。「熊野三山(熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社)」は、自然崇拜に根ざした神仏習合の形態をあらわし、日本の信仰の歴史上、貴重な資産となっている。三つの大社のほかに、青岸渡寺、補陀洛山寺、那智大滝、那智原始林も世界遺産に含まれる。また「参詣道」では、田辺や新宮から熊野本宮に向かう「中辺路」、紀伊半島の西南部の海沿いに行く「大辺路」が残存するほか、奈良県から熊野本宮へ至る「小辺路」と「大峯奥駈道」、及び三重県から向かう「伊勢路」がある。熊野古道ウォーク等の取り組みが行われている。
- ・2 つ目は「串本沿岸海域」がラムサール条約に登録される見込みである。「串本沿岸海域」は、本州最南端でサンゴの種が多様性で、被度が高く、熱帯魚類をはじめ多くのサンゴ礁性動物が見られ、北緯 33 度 30 分という北にありながら、熱帯性生物群集が豊富にみられるという貴重な場所である。
- ・昨年の取り組みとしては、庁内関係課室会議、市町村会議、インタープリター養成講座、協議会設立準備会などを行った。
- ・今年度の取り組みとしては事業者等へのヒアリング、南紀地区エコツーリズム推進連絡協議会の開催、またこれからエコツーリズム研修会、講演会、プログラム研究を予定している。
- ・有識者や事業者にヒアリングを実施し、課題を探った。分かったのはまず持続可能な仕組みづくり、資源ばかりが目され「経済」「地域社会」「環境保全」へ貢献しているか不明確であること、効果的な情報提供、自然や文化の保全と活用の両立、という点である。
- ・利用者の便宜を図る観点からのプログラム作り、プログラム水準の維持、こういったものが目的として必要である。また、地域のことを真剣に考え、旅行代理店の機能を持ち、人材を育成することも必要である。
- ・エコツーリズムがいかに経済等に貢献しているか説明する仕組みが必要である。
- ・情報発信は効率の良い PR の方法を検討することが必要である。
- ・自然、文化の両立については地域で価値を共有することが大事である。
- ・南紀地区エコツーリズム推進連絡協議会を立ち上げた。議論についてはまだこれからという段階である。まずは南紀熊野地域ならではのエコツーリズム等について、

検討を行う。

- ・平成 11 年の南紀・熊野体験泊では、魅惑、味覚、蘇るという 3 つのテーマがあった。あと、鍛錬というキーワードもあった。これらの意見を整理して、はやく南紀熊野エコツーリズムの内容を確立させたい。
- ・今年度は那智勝浦でエコツーリズム研修会を開催した。午前中は講義、午後が体験で、もてなしの心等を学んだ。
- ・今月 23 日にラムサール条約登録記念式典を開催する予定である。それに合わせてエコツーリズム講演会を開催する予定。珊瑚は潜らないと見られないので、地元の人でも素晴らしさを知っている人は少ない。この講演で知ってもらい、価値を共有する。
- ・最終年度に向けた取り組みについては、今年度中に、和歌山県の南紀熊野地域ならではのエコツーリズムの概念について内容を詰め、その概念に沿ったプログラムの検討等を行いながら、情報発信を行っていききたい。

質問 1

- ・体験観光・ほんまもん体験の集客が伸びているようだが、エコツーリズムとどのような関係があるのか。

南紀・熊野地区（和歌山県）

- ・ほんまもん体験は観光というテーマでやっている。そのなかで南紀のエコツーリズムとして PR できたらよいと考えている。

質問 2

- ・三重と和歌山は独自にやっているようだが、何らかのコンセプト、事業について共通するものがあって欲しいと環境省としては思うのだが、そのあたり、今後どのように進めていくつもりか。

南紀・熊野地区（和歌山県）

- ・（和歌山）エリア的にも広いので、なかなか調整まで至っていない。ただ来年は最終年度なので、考えていきたい。
- ・（三重）地域内できちんと打ち合わせをしているわけではないのだが、紀伊半島南部におけるエコツーリズムの推進は是非やるべきだ。できるなら、日本中でそうなるべきだ。それぞれの地区がそれぞれのビジョンを持つことが第 1 歩である。それぞれの地区ががんばっていけば、尊重しあい、影響しあうようになり、そうした中から共通した部分が見出せるようになる。